

【事例報告2】

学生の社会的成長を支援する滞在型図書館を目指してー マイライフ・マイライブラリー ー

報告者：東京女子大学教育研究支援部図書館課長 橋本 春美

1 マイライフ・マイライブラリーとは

2007年9月、東京女子大学の学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラムである「マイライフ・マイライブラリー」が文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に選定された。これは、図書館を、学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し（＝マイライフ支援）、活気に満ちた知的探求の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制を整備するというプログラムである。その大きな特徴は、従来学習支援に限定されていた図書館の学生支援を、他部署との連携を図りながら、総合的に学生の社会的成長を実現する取組みとして進めていくところにある。

2 多様なニーズに対応した空間の整備 ーマイライブラリーー

2007年度末に図書館の1階を中心に大幅な改修を行い、図書館本来の学習・研究のための環境に加え、多様化する学生のニーズに応えた空間を整備した。

これにより、eBookやeJournal、データベースによる学術情報検索・収集から論文作成までが可能なメディアスペース（1階）、自由に意見交換しグループ学習のできるコミュニケーション・オープンスペース（1階）、小規模な発表・学内イベント等に利用できるガラス張りのプレゼンテーションルーム（1階）、飲食可能で学習の合間に気分転換できるリフレッシュルーム（1階）、遮音性が高く密度の濃いグループ学習に利用できるグループ閲覧室（既存の3階3室に加え1階に3室）、一人で集中して学習できる個人ブース（2階8室）という多様な空間が整備された。学生は自分の目的に合わせて、「活発な交流の場」と「静謐な環境」、「学習」と「くつろぎ」のように相対する機能のある複数の空間を、選択利用することが可能となった。また、これらの全てで、備付けと貸出用のPCによりデジタル情報と紙媒体の情報がシームレスに利用できるようになり、学生の図書館における学習環境を格段に充実させることができた。

3 学生協働サポート体制 ーマイライフー

「マイライフ・マイライブラリー」のもう一方の柱である多様な学生ニーズに対応した「学生協働サポート体制」は、学生アシスタントを積極的に活用して、学生を支援していく取組みである。

(1) 学生アシスタントの活動状況

学生アシスタントには、①ボランティア・スタッフ、②サポーター、③システムサポーター、④学習コンシェルジュがある。2008年度当初に前期メンバーを募集したが、いずれも予定のコマ数を十分に満たす応募があった。

2008年度の学生アシスタントの活動状況は次表のとおりである（人数は2008年度前期実績）。

区分・人数	活動内容等
ボランティア・スタッフ 応募人数 20名	自分自身が図書館を利用しながら、他の学生からの質問に答える他、選書ツアー参加、推薦図書POP紹介等も行う。

採用人数 20 名	活動時はオレンジのバンダナと、机上のバルーンが目印。
サポーター 応募人数 27 名 採用人数 22 名	配架・書架整理等のアルバイトの傍ら、他の学生からの質問に答える他、蔵書点検、新入生オリエンテーション時の館内案内等も行う。活動時は、赤いエプロンをする。
システムサポーター 応募人数 10 名 採用人数 8 名	メディアスペース、コミュニケーション・オープンスペース等のパソコン 70 台の操作説明やトラブル対応を行う。アシスタント・アイランドで学生に対応する。
学習コンシェルジュ 応募人数 9 名 採用人数 5 名	学部学生を支援する目的で大学院生を採用。資料の探し方、レポート、論文作成についての基本的な質問、学習全般に関する質問に対応する。アシスタント・アイランドで学生に対応する。

※学生アシスタントに加え、サーチャー資格を持った職員が情報検索支援を行っている。

(2) 多様な学生ニーズに対応した「学生協働サポート体制」-マイライフの目指すもの

この取り組みでは、積極的な学生には、整備された学術情報の利用、学内企画への参加、他の学生への支援を通して更なる成長を促し、大学の学習・環境の転換に適応できず、学習の目的が見定められない学生には、同じ学生同士で援け合う環境を提供することで、目標を見出し自分の力で一歩踏み出せるように支援することを目指している。

学生アシスタント自身も支援される側から支援する側が変わることができ、また、ボランティア・スタッフからサポーター、サポーターからシステムサポーターや学習コンシェルジュへとステップアップしていく一連の形がロールモデルとなり、成長が期待できる。さらには、アシスタント同士で連携を取りチームワークで問題解決に当たることで、コミュニケーション能力や判断力、決断力を養っていくことも可能である。

学生アシスタントは熱意を持って積極的に活動するとともに、学生目線での提案も出されており、図書館運営に大いに参考になっている。

4 その他の活動

その他の学習支援としては、**情報リテラシー講習**、**基礎的日本語能力養成講習**を行うとともに、**自習プログラム**を導入している。

また、学内の他部署との連携を強化しており、例えば、キャリア・センターによるプレゼンテーションルームでのワークショップの実施やキャリア・センターとの連携による自習プログラム E-testing の提供、電子掲示板による学内情報の提供等を行っている。

5 利用状況の変化

東京女子大学図書館では、2004 年度、2005 年度の 2 年間をかけて開館時間を夜 10 時までに延長したにもかかわらず、入館者数の減少及び館外貸出冊数の減少を食い止めることができなかったが、リニューアル後の変化を見てみると、入館者数については 2008 年 4 月～8 月で前年度比平均 28.5%増加しており、貸出冊数についても同一期間で平均 4.9%増加している。

新しい図書館としてリニューアルすることには、当初学内においても、図書館本来の機能が後退してしまうのではないかと、静謐な学習研究の場が維持できるのかといった懸念があった。スタートして間もないため、今後どのようにこれらの数字が推移するのか予測できない部分もあるが、入館者数の増加は、従来からの図書館の機能に関しても、いい意味で波及効果を生んでいるのではないかと推測

している。そして、懸念されていたコミュニケーション・オープンスペースの利用も比較的静かであり、リフレッシュルームの音も他の部屋の利用を妨げることはなっていない。

6 学生支援GP申請の経緯

東京女子大学では、2002年度より学長を委員長とする委員会を設置し、GP申請を契機に建学の精神の再確認を行いつつ、申請内容が実現可能であるか、公募内容に適合した計画であるか、補助金終了後も継続可能であるか等について検討し、申請の可否を決定している。併せて、申請にあたり、学内調整が必要な事項について、関係の委員会等との協議を行って、申請までに学内コンセンサスを得ている。

図書館が今回申請することとなった背景には、図書館事務体制の大きな変革があった。大学全体の事務組織改編により、2002年度までの図書館事務部3課専任事務職員15名体制は、2003年度には教育研究支援部図書館課(1課)専任事務職員12名体制へと移行した(現在は専任職員8名)。このような中、図書館内部から、職員数の減少により余裕が生じた事務室スペースの有効活用をはかり、利用者減少を打開するための改革を望む声が上がってきた。これが「多様な学生のニーズに応じた空間と学生協働サポート体制を整えた滞在型図書館」という提案につながり、2006年度には年次計画でフロア改修を行っていく見込みが立った。その後、この計画が2007年度に公募された学生支援GPに適用するのではないかという意見が出て、委員会の検討を経て、申請することとなった。

7 マイライフ・マイライブラリーの今後

実施2年目となったマイライフ・マイライブラリーでは、学生たちの力強い協力が得られている。学生支援GPの補助金はいずれ終わるが、国の補助金を受けている間に、この取組みを軌道に乗せ、図書館が知の殿堂に加え、学生たちに知への興味や、期待感を抱かせる拠点となるよう、取り組んでいきたいと考えている。